

国語科学習指導案

研究テーマ

「子ども達が友達の意見を聴き合うことによって、想像力を広げる読みの支援のあり方」

～関わり合う場を作るためのデジタル教科書・電子黒板の効果的な活用の仕方～

期日 平成22年10月29日（金）

単元名 「お手紙」 アーノルド＝ローベル作・絵

指導者 北信教育事務所指導主事 酒井 秀樹 先生

授業学級 2年3組

授業者 飯嶋 啓志 教諭



I 研究テーマ	… 1
II テーマ設定の理由	… 1
III 研究の概要	… 2
IV 研究の仮説	… 6
V 本時の学習指導案	… 7
1 単元名	… 7
2 単元設定の理由	… 7
3 単元目標	… 7
4 単元の展開	… 7
5 本時案	… 9
(1) 主眼	… 9
(2) 本時の位置	… 9
(3) 指導上の留意点	… 9
(4) 展開	… 9
(5) 実証の観点	… 10
6 教材研究	… 11
(1) 本時にかかわる視聴覚教材とその活用方法	… 11
(2) 素材の教材化	… 12

I 第42回長野県視覚・放送教育研究大会更埴・長野市南部大会の研究テーマと本校の研究テーマ

<第42回長野県視覚・放送教育研究大会更埴・長野市南部大会主題>

「広い視野をもち、新しい文化を築く心豊かな人間の育成をめざして」ー教育メディアの効果的な活用を通してー

<研究目標>

「一人一人の子どもの学力向上と、心豊かな人間性をめざす、教育メディアの効果的な活用のあり方を実証する」

<埴生小学校の研究テーマ>

「子ども達が友達の意見を聴き合うことによって、想像力を広げる読みの支援のあり方」
～関わり合う場を作るためのデジタル教科書・電子黒板の効果的な活用の仕方～

II テーマ設定の理由

(1) 本校の教育課題について 本校教育課題「唯聴心ー心を聴くことのできる子どもの育成」

本校教育課題は、「唯聴心ー心を聴くことのできる子どもの育成」である。

子ども達を「聞く」ことから、「心を聴く」状況にするには、教師が子ども達に聞く姿勢を教えることと心をそこ(対象)に置く取り組みを充実させることが大切である。

教師が子ども達に聞く姿勢を教えることは、日々の授業の中で子ども達に学習の取り組みの基本姿勢を教えることである。例えば、授業者が話をする時、子ども達全員が授業者を見て聞いていること、子どもが発言をする時、他の子ども達は発言者の顔を見て聞いていること、その発言に対して反応する習慣がついていることなど、具体的な聞く姿勢を子ども達に身に付けさせていくことである。

心をそこ(対象)に置く取り組みとは、毎日の生活の中から、まず教師が子ども達に、教え・鍛え・育てていくことで生きて働いてくるものである。例えば、「下駄箱で靴を揃える」ことで、心をその靴という対象に置き、日々靴を揃えることから心を揃えることを育てていくことに繋がっていくのである。子ども達が日々靴を揃えることを取り組む上では、「我慢すること・みつけること・親切にすること」が鍛えられていくと考えられる。

国語科の学習においても、子ども達に「聞く」姿勢を身につけさせるだけでなく、この心をそこ(対象=教材や友の考え)に置き、対象に没頭して取り組み、友の話に耳を傾けて聴くこと、又は、友の話の心中にある思いも想像して聴くことが、「心を聴くこと」であると考え、研究に取り組んでいきたい。

(2) 本校の児童の実態

① 子ども達は、教師や読み聞かせボランティアの方々がする本の読み聞かせを聴くことが大好きである。熱心にお話を聴き、物語の展開に一喜一憂している。物語に意地悪な人物が出てくると、「ひどいよ。」「かわいそうだ。」「仕返しをしてやりたいよ。」とつぶやいたり、反対に面白い話だと、「そこが面白い。」「笑えるよ。」と声を立てて笑ったりしている。

①の実態を振り返ると、子ども達が本を読んでもらった中で、興味を持って面白かった・楽しかった・登場人物の気持ちに寄り添えるという経験をしてきたから、又、本を読んでもらうと面白いことがありそうだという思いを子ども達が持ち、熱心に読み聞かせに耳を傾けるのであろう。

② 子ども達が興味を持ち、具体的に追究できそうだと見通しがもてるものだと、課題をもち、学習を進めていくことができる。それについて発表する時も、みんなに話したいと思い、一生懸命取り組むことができる。しかし、中には、友達の意見をしっかり聴こうという意識があまりなく、友達の意見に対する反応も弱い子どももいる。又、友達が話している所を見ていないので、言葉に詰まってしまった発言者の困った様子が分からず、その子の思いを汲んで話をつなげていこうとすることができないこともある。

③ 子ども達に、物語や詩を読んで浮かんだ情景や登場人物の思い・筆者の考えなどを書かせた上で発表させるが、進んで意見を言う子が少ない。語彙力があり、表現力豊かに書くことができるのに、自信を持って発言できないでいる。喜んで発言する子の中には、深まりがない、思いつきの発言になってしまう子どももいる。高学年になるほどこの傾向が見られる。発言を支える語彙力が少ないこと、言い方がわからないことも要因である。

②、③の子ども達の実態から、教師が授業を構想していく時に、子ども達に目的意識を持たせた授業を行ってこなかったからではないか。子ども達がこのような活動をするためには、こうやって学習してみたいと自ら考えていけるような必要感を持たせる授業を組み立てていったらよいと考える。

④ 子ども達が物語や詩を読んだ時、その作品の登場人物の立場に立って考えることや描かれている情景などを想像することが、通り一遍等の表現しかできないことが多い。想像を広げていくことが苦手である。子ども達の中には、登場人物になりきって思いを豊かに表現する子どもや描かれている情景から想像を広げていくことができる子どももいる。そのような

子ども達の良さが他の子ども達にも伝わらず、学習が広がっていかない。

本校では、愛知教育大学の志水廣先生の〇付け法や意味付け復唱法を実践してきた。子ども達の伸びている部分を認め、励まし、その良さが他の子ども達にも広がるように、意味付け復唱をしてきた。

国語科の授業においても、このことを実践してきたが、④の子ども達の実態を振り返ると、国語の授業の中での言葉を手がかりにしてイメージを広げることを学ぶ場、子ども達が主体的に自分の考えを持つことができる場、友の意見を聴き合うことで自分の考えを再思考する場を、どのように作っていったらいいのか、追究していきたい。

(3) 国語科におけるテーマ設定の理由

本校本年度研究テーマ「自ら学び自ら考える力を育てる授業の創造」とは、国語科においては、次のように考える。

教師が、子ども達に言葉を手がかりにしてイメージを広げさせ、主体的に自分の考えをもつことができる場を作り、それによって、子ども達が心をそこ(対象＝教材や友の考え)に置き、対象に没頭して取り組み、友の話に耳を傾けて聴いたり、友の話の心中にある思いも想像して聴いたりすることができるように、教師と子ども達で共に授業を創り上げていくことである。

以上のことから、本研究テーマ「子ども達が友達の意見を聴き合うことによって、想像力を広げる読みの支援のあり方」と設定した。

又、本研究テーマに迫るために、子ども達が友達の意見を聴き合う場を効果的に作ることはできないかと考えた。子ども達の考えたことがわかりやすく目に見える形にして示すことができる、考えを共有する場があれば、それを見ながら子ども達一人一人が自分の考えを再思考することができ、想像力を広げて読むことにつながる。そこで、デジタル教科書や電子黒板を使って、視覚的に子ども達の考えを共有する場を作ることができるのではないかと考え、サブテーマ「関わり合う場を創るためのデジタル教科書、電子黒板の効果的な活用の仕方」を設定した。

(4) 大会主題の受け止め

大会主題「広い視野をもち、新しい文化を築く心豊かな人間の育成をめざして」とは、本校児童の姿を捉え、本校教育課題に迫れるように国語科において実践していく上で、友達の考えや教材に目を向け、自分の中に新しい考えや知識を取り込み、子ども達が成長していくことであると考え。また、効果的に視聴覚機器を使うことが子ども達の学力向上に役立ち、一教育メディアの効果的な活用を通して一というサブテーマに繋がると考える。

Ⅲ 研究の概要

(1) 段階的に「きく力」を育てること

本校では、「聞く」姿勢を身に付けさせた上で、「聴く」姿勢作りに重点をおいて取り組んでいきたいと考える。

①「聞く」姿勢を身に付けさせる

＜話しを聞くための約束＞

- ⑦授業が始まる時に、必要な勉強道具を用意しよう。
- ⑧授業の始まりのチャイムが鳴ったら、席に着こう。
- ⑨先生が話しをする時、先生の顔を見て話しを聞こう。
- ⑩友達が発言する時、友達の顔を見て話しを聞こう。

授業が始まる際の姿勢作り

入学して、学習に対する姿勢が定着していない1年生。「よい姿勢」といっても何をすればよいのかははっきりしないので、よい姿勢とはどういうものをひとつひとつ確認していき、目で見てわかるように図で示した。

手はひざにおく・足は床につく・背筋を伸ばす・顔は前を向く

授業のはじまりの挨拶の時に、当番が「よい姿勢になりましょう」と呼びかけ、姿勢が崩れている子を注意していたが、時間がたってもなかなか全員揃わない。そこで、当番がよい姿勢の子の名前を呼んでいくようにした。すると、すぐに全員揃うようになり、スムーズに授業に入っていくことができるようになった。

＜考察＞

1年生の子ども達は、何をすればよい姿勢になるのか、具体的にひとつひとつ教えて見通しをつけることが大切である。また、ほめること、認めることが子ども達にとって大きな励み、大きな意欲となる。

低学年で身につけた「聞く」姿勢を高学年になってもそのまま行えるようにするためには、型で縛るだけでなく子ども達が「聞く」ことを行えば勉強に役立つと感じさせる授業を教師が行っていかなければならない。

②「聴く」姿勢作り

- ④先生や友達の発言を聞き、わかったらうなずいたり、わからなかったら質問したりしよう。
 - ⑤友達の間違いを笑わない。間違いから学ぶことに気づこう。
 - ⑥友だちの意見や考えから、新しい気づきや考えがあることに気付こう。
- <子ども達が聴く姿勢を作るための教師の立場>
- ⑦子ども達に考える時間や場を確保している。
 - ⑧教師一人で説明している授業を進めず、子どもの発言を聴き、子どもに返す切り返しを行う。
 - ⑨発言することの必要性を感じる学習課題を設定する。

ブレインストーミングを使った言葉さがし

5年4組の言葉(熟語等でも)探しの場面では、ブレインストーミング的な方法を使い、アイデアを早くたくさん出し合う活動に取り組んだ。一人ひとり順番に友達から出されていないアイデアを出すという方法で、間をおかないように言っていく。漢字の部首調べでは、自分が調べた漢字を友達と重ならないようにどんどん言っていく活動をした。友だちの意見を聴いていないと同じ意見を出してしまうので、よく聴くことも要求される。自分が何を言うかよく考え、友だちとは違う意見を言うためによく聴くことができた。

<考察>

自由に意見や考えを出し合うというブレインストーミングの方法なので、子ども達はいろいろなアイデア出しやすい。また、友達の意見をよく聴いていないと同じ意見を出してしまうので、よく聴かなければならない場を子ども達に必然的に作ることができるといえる。

自分達の考えたオノマトペを出し合う

2年「おおきなあれ」という詩の学習で、『ふるん ふるん ちゆるん』というオノマトペが出てくる。そこで、子ども達にも言葉の語彙を広げさせるために、教師の出した言葉から想像したオノマトペを考える勉強をした。例えば、教師が「プールで水遊びをしている時の音」という課題を出すと、子ども達は「バシヤ、バシヤ」とか「ザッバーン」等というオノマトペをたくさん考えた。教師が用意したプリントに書ききれないほどたくさんのオノマトペを書き出した子もいれば、一生懸命考えていたけれどもやっと一つ書いたと言う子どももいた。なかなか書きだせない子ども達の語彙を増やすために、自分達の考えたオノマトペを出し合い、なるほどいいなあと思うオノマトペをプリントに書き足していくことにした。オノマトペをなかなか考えられなかった子どもも、友達の考えを聴きながら、オノマトペには決まり事があるのではなく、自分の感じたままに自由に言葉を作っていくといいとわかり、自分からも少しずつ作れるようになってきた。学習の最後に、「おおきなあれ」の詩の続きを子ども達が一人ひとり考えた。そこで、以前いろいろなオノマトペを出し合っていたので、『ふるん ふるん ちゆるん』にあたるオノマトペを自分なりの表現で書くことができた。

あめの つぶつぶ	あめの つぶつぶ
なしに はいれ	さくらんぼに はいれ
ポリ ポリ ガリン	プニュ プニュ プリン
ポリ ポリ ガリン	プニュ プニュ プリン
かたくなれ	あまくなれ
あまくなれ	おいしくなれ
O・M児	I・N児

<考察>

子ども達に自分で考える時間や友達の考えを聴き合う場を作ったことで、子ども達の語彙のイメージが広がったと考える。子ども達が自分にはなかったイメージを他の子ども達から得ることができた。そして、最後に「おおきなあれ」に詩を書く時に、自分なりの表現でオノマトペを入れることができた。始めの頃、オノマトペを考える場面ではあまり書けなかった子が、この時は悩まずにスラスラと書いていた。

(2)子ども達の考える場を教師が工夫する。

- ・ イメージマップを使って、言葉のイメージを広げる練習をする。
- ・ バタフライマップを使って、単元学習の中で子ども達に考える場を用意し、自分の考えと友達の考えを関わらせる。

- ・ 単元学習のまとめとして言語活動を入れ、単元の始めから子ども達に学習の目的を持たせる。
例) 音読発表会、〇〇日記を作ろう、パンフレット作り、クイズ作り、図鑑作り、本の帯作りなど
- ・ 視聴覚機器の効果的な活用

イメージマップを使った「書く学習」でのテーマの決めだし

5年「人との付き合い方」の単元は、調査学習の後に発表会を開くという流れの学習である。その導入として「環境問題」というテーマでイメージマップ作りを行った。イメージマップの活動は、学級全体で昨年度、総合的な学習の導入として一度、今年度は総合的な学習の導入と国語の「言葉の研究レポート」で経験している。

「言葉の研究レポート」は、初めて一人ひとりがマップを作るということで、なかなか思うようにイメージが広がらない子もいて、グループの友達と相談しながらようやくマップを書くような姿も見られた。また、マップからテーマ決めだす場面でも、自分なりのイメージが十分に広げられていないために、見つけられない子も見られた。

そこで今回は、大テーマを提示した後、考えられるイメージをいくつか全体の出し、その後各自の活動に入った。マップの活動の経験が増えてきていたことやテーマが「環境問題」というタイムリーなものであったことから、自分なりのイメージをたくさん広げることのできた子が多く見られた。その後全体でのマップ作りを行った。十分にイメージが持っていたので、普段なかなか発言できにくい子ども達も自信を持って意見を言ったり、友達の意見を聴いてそこからさらに発想を広げていったりするような場面が見られた。さらに教科書の資料を読み、再度マップへの付け足しを行った。

その後、マップを使って自分のテーマの決めだしの活動につなげていった。マップの意見を基に自分なりのテーマを見つけ出すことのできた子が多く、マップが生きた学習となった。

<考察>

マップを使った授業を去年から経験し、また、考えられるイメージをいくつか全体の出し合うという場を作ったことで、子ども達が自分なりのイメージを持つことができたといえる。このような場を作ったことで、自分のテーマの決めだしの活動にも生かし、マップを発展させていくことができた。

音読の仕方を考え合うことを通して、子ども達同士の考えを聴き合う

4年1組では、『3つのお願い』を学習したとき、音読の仕方を子ども達同士で考え合った。

- ① 叙述から読み方の工夫をメモする。
- ② 友達の工夫を聴き、自分が気付かなかった意見をメモする。
- ③ 実際に音読を聴き合う。
- ④ 友達の音読の良さをメモする。

この①～④の繰り返しで、子ども達の読み声は格段とレベルアップしていった。「もっとうまく読んでみたい。」という思いが、友達の意見や読み声に集中し、絞り込まれていった。友達の音読にうっとりしたり、良い気付きの発見に期待したりする子ども達の表情が印象的だった。会話文が多く、感情が分かりやすい教材なので意見もちやすかった。

<考察>

②の友達の工夫を聴いて、自分が気付かなかった意見をメモするという活動や、④の友達の音読の良さをメモする活動をしたことで、自分の考えから友達の考えへと視野を広げて考えることができた。友達の良さを聴き合うことも、子ども達が安心して話すことができる雰囲気作りに役立つといえる。

バタフライマップを使って、物語の内容を読み取る

2年「スイミー」では、子ども達はスイミーの赤い小さな魚の兄弟達が生きていて再び会うことができたと思っている子ども達と、大きなマグロに食べられたから死んでしまったと読み取っている子ども達がいる。

そこで、本文の読み取りをしっかりとさせたいと思い、バタフライマップを使って子ども達同士で本文の内容の読み取りを考え合わせることにした。テーマは、「小さな赤い魚の兄弟達は、死んだのか生きているのか」で、生きていると思う派と死んでしまったと思う派に分かれた。自分がそう思う証拠を本文から出し、その理由を述べさせるようにした。生きていると思う派の子ども達は、死んでしまったと思う派の子ども達の本文から裏付けられた理由に次第に自分の読み取りの曖昧さに気付いていった。

<考察>

テーマを設け、子ども達に考える場を用意したことで、友だちの意見を聴き何回も本文を読み返すうちに、子ども達は正確に本文の内容を理解するようになった。教師が説明するよりも、子ども達は自分達で考えることができたという自信にもつながったといえる。

子ども達の考えを書き込めるデジタル教科書

2年「スイミー」の学習で、スイミーの気持ちの変化に注目しながら、どのように音読していくか子ども達と考え合った。それぞれの場面毎に、子ども達がどのように音読していきたいか、音読記号に表し、デジタル教科書に書き込んでいった。マジックの機能を使い、子ども達の意見をその場で書くことができ、それを保存し、いつでも見返すことができた。

<考察>

従来のように、本文を書いた模造紙を何枚も黒板に提示し、子ども達から出された意見を書き込んでいくよりも、デジタル教科書を使う方が効率的である。前時に子ども達が考えた音読記号をすぐに出して振り返ったり、学習のまとめとして全文を音読する時に順次提示したり、便利に使うことができる。

子ども達の描いた絵を電子黒板に提示し、物語の主人公に思いを寄せる

2年「スイミー」で、魚の兄弟達を失い悲しんでいるスイミーが海の中の素晴らしい生き物を見て、だんだん元気を取り戻していく気持ちを考える学習を行った。

水中ブルドーザーみたいないせびやにじ色のゼリーのようなくらげなどの海の生物の絵を子ども達に描かせ、それを全部スキャナでパソコンに取り込み、海の中の絵として電子黒板に提示した。子ども達が描いた海の中の絵を大きな電子黒板の画面に広げることで、子ども達のイメージが広がり、生き物のどんな所を見たから、だんだん元気になっていったのか、スイミーの気持ちに寄り添って考えることができた。

<考察>

教科書の挿し絵には、スイミーが見た海の中の素晴らしい生き物は載っていない。この場面を子ども達に描かせ、それを電子黒板に提示したことは、子ども達に実際に海の中を見ているような感覚を持たせ、想像を広げる手助けになったといえる。又、子ども達全員の絵を提示したことで、他の友達はどうな思いで絵を描いたのか聴きたくなり、自分にはなかった考えを聴くことができる場になったといえる。

IV研究の仮説

～こんな子ども達の姿から～

- 本の読み聞かせに興味をもって熱心に聴くことができる。
- 具体的な見通しが持てると、進んで課題を持ち学習を進めることができる。
- 物語や詩を読んで浮かんだ情景や登場人物の思い・筆者の考えなどを書かせると、語彙力があり、表現力豊かに書くことができる子どもがいる。
- 友達の意見をしっかり聴こうという意識があまりなく、友達の意見に対する反応が弱い。
- 物語や詩を読んだ時、その作品の登場人物の立場に立って考えることや描かれている情景、筆者の考えなどについて想像を広げて考えることが苦手である。

～手立て～

- ・ 段階的に「きく力」を育てること
- ・ 子ども達の考える場を教師が工夫する。
 - ◎イメージマップを使って、言葉のイメージを広げる練習をする。
 - ◎授業の中で子ども達に、友達の意見や考えを見合う場を用意し、自分の考えと友達の考えを関わらせる。
 - ◎単元学習のまとめとして言語活動を入れ、単元の始めから子ども達に学習の目的を持たせる。
 - ◎視聴覚機器の効果的な活用

～期待される子ども達の育ち～

- ・ 友達の意見に反応しながら、聴くことができる。
- ・ 友達の意見に対して自分の考えを言うことができる。
- ・ 物語や詩を読んだとき、その作品の登場人物の立場に立って考えることや描かれている情景、筆者の考えなど、想像を広げて読むことができる。

1 単元名 「お手紙」

2 単元設定の理由

2年3組は算数のように答えがはっきりしていて自信があるときは多くの挙手があり、積極的に発言しようとする子どもが多い。一方で、国語のように自分の考えを言ったり、想像したことを話したり、いくつかある答えの一つを見つけたりする時は、自信がなくて発言するのをためらう子どもがいる。また、発言するときに、自分の意見だけをいう子どもがほとんどだったが、発表する友達の方を向いて、友達の意見をよく聞く練習をしたり、前に言った友だちの意見と「同じで」「違って」「似ていて」など言えた子どもの姿を認めたりしていくうちに、自然と友達の意見と関連させて自分の意見を言えることが多くなった。しかし、自分の考えを発表するとき、ここにこう書いてあるから、といった叙述を根拠にした発言は少なく、なんとなく思ったことだったり、根拠はあるのだけどそれを説明できなかつたりすることが多い。「スイミー」の単元では、だんだん元気を取り戻す海の底の場面で、多くの子どもが「海の底のきれいな景色をみて、スイミーはとても元気になった。」と考えた。しかし、一部の子どもの中に、「兄弟達が死んでしまってまだ悲しかったのではないか。」と考えを書いた子どもがいた。授業ではその意見に焦点が当たらず進んでしまったが、その子どもの考えの元になる「とてもかなしかった」「だんだん～」といった叙述に目を向けることで、スイミーの心情を深く追及することができたかもしれない。そこで、この単元では、かえるくんやがまくんの心情を考える時、自分の考えのもととなった叙述を意識することで、自分の考えに根拠を持つことができ、合わせて、自信を持って発言することにつながっていくと考えた。

また、子どもたちは、本文に書かれていることは読み取れるが、自分の想像力を働かせて様子を考える経験が少ない。「お手紙」は、2年生にとって手紙をもらうという体験や、自分たちの友だちとしてもいそうなかえるくんとがまくんであるので、心を寄せて気持ちを想像しやすい。本文は、登場人物の会話でお話が進行し、二人の行動が書かれている。二人の心情については直接的に詳しく書かれていないが、会話のやり取りや会話の叙述に注目することで気持ちを想像できる。挿絵もその助けになるだろう。

アーノルド＝ローベルの「かえるくんがまくん」を班ごとに劇にする活動においても、セリフを言う時に、その登場人物がどんな気持ちだったのかを考えて、読むことを大事に考えてほしい。叙述に注目し、登場人物の心情を考えてきた学習活動を生かし、班ごとに気持ちを考え、読み方を工夫し、お話を発表しあうことが楽しくできるだろう。

以上のことから、場面の様子について、叙述を元に根拠をはっきりさせながら心情を考えたり、登場人物の行動を中心に想像を広げたりしながら、物語を楽しく読む力が育つと考え、本単元を設定した。

3 単元目標

- ◎ 「だれが・どうした」に気をつけて、登場人物の気持ちや場面の様子を想像しながら読んだり、声に出して読んだりし、二人の友情のお話を楽しむ。
- ◎ 主語と述語の役割と言い方を知り、気をつけて読む。

【書く力】

- 登場人物にあわせて、吹き出しにセリフを書く。(B書くこと一ア)

【読む力】

- ◎ 場面の様子やがまくん、かえるくんの心情について、想像しながら読む。(C読むこと一ウ)
- ◎ がまくんやかえるくんの気持ちがよく表れるように、語や文のまとまり、声の大きさなどに注意して読む。(C読むこと一エ)

【言語の力】

- ◎ 主語と述語の関係に注意して読んだり書いたりする。(言語事項一エ(ア))

4 単元展開

時間	学習活動	指導	視聴覚機器の活用
1	劇の発表会をするという読むための目的意識を持つ。 お手紙を書いたりもらったりした経験を話し合う。 「お手紙」を読み、感想を発表する。	劇の発表会をするために「お手紙」を読んでもいこうという目的意識を持たせる。 感想と合わせて、疑問や不思議に思ったことを出させることで以降の学習に生かしていく。	・挿絵の提示。

2	誰の会話文か確かめる。 全文を読んでみる。	かえるくんがまくんのセリフにシールを貼らせることで、誰の言葉なのかはつきりさせる。	・挿絵の提示。
3	1の場面。会話の確認。役割読み。手紙をもらえないがまくんの気持ちを会話文から読み取る。	がまくんだけでなく、「二人ともかなしい気分」だったわけを考えさせ、かえるくんインタビューすることで、悲しい気持ちを二人が共感・共有していたことがわかる。	・挿絵の提示。 ・デジタル教科書 ・電子黒板
4	1の場面。どんな読み方をしたいか話し合う。 役割に分かれて音読する。	がまくんの悲しい様子、すねた様子を意識させる。	・挿絵の提示 ・デジタル教科書 ・電子黒板
5	2の場面。会話の確認。役割読み。かえるくんの行動を順序良く読み取る。	「すぐやるぜ」のかたつむりくんの張り切っている様子を想像させ、かたつむりくんインタビューすることで、急いでいたかえるくんとのおんびりしていたかたつむりくんを対比させる。	・挿絵の提示。 ・デジタル教科書 ・電子黒板
6	2の場面。どんな読み方をしたいか。かえるくんの行動を確かめながら音読する。	かたつむりくんの張り切っている様子を意識させる。	・挿絵の提示。 ・デジタル教科書 ・電子黒板
7	3の場面会話の確認。役割読み。二人の行動を比べながら読み取る。	「あるものかい」「ばからしい」などの叙述に着目させ、がまくんにインタビューすることで、がまくんのふてくされた気持ちがわかる。	・挿絵の提示。 ・デジタル教科書 ・電子黒板
8	3の場面。どんな読み方をしたいか。二人の気持ちが表れるように音読する。	がまくんのふてくされた様子を意識させる。	・挿絵の提示。 ・デジタル教科書 ・電子黒板
9	4の場面。会話の確認。役割読み。手紙を待つ二人の気持ちを考える。 (本時)	「きみが」「ああ」の言葉について考えさせ、手紙をもらえたがまくんにインタビューすることで、がまくんの手紙をもらえるうれしい気持ちがわかる。	・挿絵の提示。 ・デジタル教科書 ・電子黒板
10	4の場面。手紙が届いたときの3人の気持ちを考える。	二人とも幸せな気持ちだったという叙述に注目し、手紙を出したかえるくんも幸せだったわけを考えることで、二人が幸せな気持ちを共感・共有していたことが分かる。	・挿絵の提示。 ・デジタル教科書 ・電子黒板
11	4の場面。気持ちが表れるように音読する。	がまくんの気持ちが変わったところを意識させる。	・挿絵の提示。 ・デジタル教科書 ・電子黒板
12	役割を決めて音読の練習をする。	最初に役割読みをしたときと比べて、うまくできたところを認め、紙人形劇発表会へ意欲を高めていく。	・挿絵の表示 ・デジタル教科書 ・電子黒板
13～ 15	4人ずつの班に分かれ、かえるくんがまくんのお話の中から一つ選び、劇にする。 ・役割を決める。セリフを確かめる。道具を準備する。練習する。	「お手紙」を含め、「親友」ということがわかるお話という観点を持ち選ばせることで、叙述にも注目できるようにする。	・ビデオ
16～ 18	クラスで発表会をする。	お互いに感想を言い合うことで、お互いに良さを認め合っていく。	・ビデオで撮影する。

5 本時案

(1) 主眼

がまくんの気持ちを考えて音読したいと思った子どもたちが、叙述や挿絵を手がかりに、「きみが。」や「ああ。」と言ったときのがまくんの気持ちを想像し学習カードに書いたり、想像した気持ちでセリフを発表し聴き合ったり、がまくんになりきってインタビューに答えたりすることを通して、がまくんの驚きや感動した気持ちを理解し、音読に生かそうとすることができる。

(2) 本時の位置

1 8時間扱い中の第9時

①前時：3の場面を二人の気持ちが表れるように音読した。

②次時：4の場面で、手紙を待つ二人の気持ちと、手紙が届いたときの3人の気持ちを考える。

(3) 留意点

- ・前時に、「次の時間に考えてみたいこと」として、「きみが。」と「ああ。」の叙述に注目させておく。
- ・劇の発表会へ意識を高めるため、発表会の目標や方法を掲示しておく。

(4) 展開

段階	学習活動	予想される児童の反応	・指導支援 「」発問 ★評価	時間
導入	1,今日の学習問題を確かめる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>学習問題</p> <p>劇をするために、登場人物の気持ちを考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日は、「きみが。」と「ああ。」を考えるんだったね。 ・「きみが。」と「ああ。」って言ったときのがまくんの気持ちを考えて、読み方を考えたい。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>学習課題</p> <p>「きみが」と「ああ」について、がまくんはどんな気持ちで言ったのか考えよう。</p> </div>	<p>「劇をするために、登場人物の気持ちを考える勉強をしているよね。」</p> <p>「今日は『きみが。』と『ああ。』をもっと考えてみよう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書は使用せず、電子黒板に注目させる。 ・電子黒板の文章を色分けしていく。 ・4の場面を音読する。 <p>★ 本時の学習問題がわかったか。</p>	5
展開	2,「きみが」はどんな気持ちで言ったのか、学習カードに書き発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・かえるくんがお手紙を書いたことを知ってびっくりしたと思う。 ・今まで一度もなかったことだからおどろいたよ。 ・全然予想もしてなかったことだからびっくりした。 ・ベッドから起きるくらいびっくりしたと思う。この絵はベッドに寝てないね。 ・おどろいたけど、まだ信じられなくて、まだふてくされていたと思うよ。 	<p>「『きみが。』と言ったがまくんの気持ちを考えて、学習カードに書いてみよう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・13ページの挿絵の入った学習カードを配布し、がまくんの気持ちを考えさせる。 ・発表された考えをキーワードとして電子黒板の挿絵に提示する。 ・「びっくりした」「おどろいた」などの発表の際は、どうしてびっくりしたのか問い返し、叙述に関わる部分は、デジタル教科書上にラインを引いて根拠をはっきりさせる。 ・今まで一度も手紙をもらったことがなかったこと、かえるくんがいつの間にかお手紙を書いてくれたことに気付かせたい。 ・机間指導をしながら、がまくんの驚いた気持ちが書かれているところに○をする。 ・発表の際、自分の考えた気持ちで「き 	13

	3,「ああ。」はどんな気持ちで言ったのか、学習カードに書き発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ とてもうれしい気持ちで言ったと思う。 ・ 感動した気持ちだと思う。 ・ うれしくてたまらない気持ちだと思う。 ・ 「親友」って書いてあってうれしいと思うよ。 ・ 「親友」って友達よりもっと仲のいい友達だからうれしかったんじゃないかな。 	<p>みが。」のセリフを言わせる。</p> <p>★「きみが」と言ったがまくんの、とても驚いた気持ちを学習カードに想像しながら書いている。</p> <p>「『ああ。』と言ったがまくんの気持ちを考えてみよう。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ かえるくんからのお手紙の文面が書かれた学習カードを配布し、手紙をもらったがまくんの気持ちを考えさせる。 ・ 発表された考えをキーワードとして電子黒板上に提示する。 ・ 考えの書けない子どもには、「ああ。」の後にどんな言葉が続くか考えてみるよう、個別に指導する。 ・ 手紙のどの部分がうれしいのか、どうしてうれしいのか問い返し、叙述に関わる部分はデジタル教科書上にラインを引いて、根拠をはっきりさせる。 ・ 手紙の内容にもとても感動したことに気付かせたい。 ・ 机間指導をしながら、がまくんの感動した気持ちが書かれているところに○をする。 ・ 発表の際、自分の考えた気持ちで「ああ。」のセリフを言わせる。 <p>★「ああ。」と言ったがまくんの、とても感動した気持ちを学習カードに想像しながら書いている。</p>	13
	4,手紙を待っているがまくんになりきって、インタビューに答える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「初めてだからすごくうれしいです。」 ・ 「どんなお手紙なのか早く知りたいです。」 ・ 「ぼくもお返事書きたいです。」 ・ 「お手紙を待つ時間が楽しくなりそうです。」 ・ 「お手紙が届くのが待ち遠しいです。」 ・ 「うれしくてたまらないです。」 ・ 「かえるくんとならずっと待てちゃうよ。」 	<p>「お手紙を待っているがまくん、今の気持ちを答えてください。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いすを用意し、お面をかぶり、がまくんになったつもりで座らせる。 ・ 14 ページの挿絵を提示することで、二人が幸せな気持ちで待っていることに気付かせる。 ・ 二人ともとても幸せな気持ちになって待っていたことに気付かせたい。 <p>★がまくんのとても幸せな気持ちを想像しながらインタビューに答えている。</p>	10
終末	5,学習を振り返り、音読の仕方について見通しを持ち、音読する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「きみが。」のところがすごく驚いた感じで読みたいです。 ・ 「ああ。」のところは、すごくうれしい気持ちを出したいです。 	<p>「この場面をどんな風に読んでみたいと思ったかな。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 電子黒板上の本時の学習を振り返らせる。 <p>★音読への見通しが持てている。</p>	4

(5) 実証の観点

- ・ 「きみが。」と「ああ。」に注目し、想像した気持ちでセリフを発表し聴き合ったり、インタビューに答えたりしたことは、がまくんの驚きや感動の気持ちを理解し、音読への見通しを持つのに有効であったか。
- ・ 挿絵の提示、デジタル教科書の活用、意見の提示は、がまくんの気持ちを考える本時の学習に有効であったか。

6 教材研究

(1) 本時に関わる視聴覚教材、機器とその活用方法

ア. ハードウェア

①電子黒板（スマートボード:スマートテクノロジー社）

スマートボードは、ホワイトボード上に自由に文字やマーキングができる感圧式タッチパネル方式の電子黒板。専用のペンツールだけでなく、指を使って書き込み、操作ができる。

直感的に操作でき、かつ PC 本体のキーボードや、マウスの操作に縛られないため、子どもの視線をそらすことがなく、集中させる効果も期待できる。

②プロジェクタ

電子黒板を利用する際に必要。光量が十分で投影場所を確保できれば、かなり大きく教材を映し出すことができる。

教室の限られたスペースの中で設置場所の確保が難しい。またスクリーンとの間に障害物があると影ができてしまうのが難点。

イ. ソフトウェア

①ノートブック（スマートボード付属ソフト：スマートテクノロジー社）

スマートボードで使える白板ソフト。スマートボードの機能を生かすことができる。ペンでホワイトボードのように書き込めるのはもちろん、取り込んだ写真、イラスト、ビデオ、音声白板上に配置し、提示することができる。

書き込んだ線、写真やイラスト、文字は拡大縮小、回転が簡単にできる。また透明度を変えて表示することも可能。手書きした文字を文字データに変換することもできる。

写真などのデータはギャラリーとして登録することで、再利用が容易。

できあがった白板データは、保存/印刷ができる。

②光村国語デジタル教科書（光村図書）

光村図書の作成した PC 用のコンテンツ。教科書のすべてのページの表示が可能。またさし絵や本文のみを取り出して表示したり、ペンツール・スタンプツールなどで書き込んだりすることができる。本文に書き込んだ物はページの中に残り、他のページからもどってきても再表示される。

音読をさせることも可能。関連する資料（写真）も収録されている。漢字の書き順を表示させる機能もある。

ウ. 本時の活用方法

①スマートボード（ノートブック）

ア) さし絵を提示し、がまくんの気持ちを考える手がかりにさせる。

イ) 子どもたちの考えを端的に書き入れることで互いの意見を明確にし、さらに並べ替えや線で囲むことによって、その共通点や相違点をわかりやすく提示する。

②光村国語デジタル教科書

ア) 線ひきをすることで、それぞれの会話文がだれの言葉なの明確にする。

イ) がまくんの気持ちを考えた根拠が叙述のどこなのか示す。

これらの機器による提示で、子どもたちは共通の考えや叙述により着眼することができる。ひとつの考え、叙述に一斉に目を向けることにつながる。それにより、本校で大切にしたい「聴く姿勢」作りにつながり、「聴く力」をつける一助となると考える。

(2) 教材研究

①主題

お手紙がこなくて悲しんでいるがま君を思い、喜ばせてあげようとするかえる君と、かえる君のお手紙に感激して喜ぶがま君とのほのぼのとした友情

②構想

- 場面一 来るあてのない手紙を待ち、孤独感にうちひしがれるがま君と、がま君の悲しみに共感するかえる君。
- 場面二 大急ぎでがま君への手紙を書き、かたつむり君に手紙を託すかえる君。
- 場面三 がま君の家で、手紙が着くのを待ちわびて何度も窓から外をのぞきながら、あきらめて投げやりな言葉を返すがま君を懸命に元気づけようとするかえる君。
- 場面四 手紙を待ち切れずに、全てのことを打ち明けてしまうかえる君と、かえる君の手紙に感激するがま君。かえる君と一緒に幸せな気持ちで待ったあげくに手紙をもらい、喜ぶがま君。

四の場面の叙述の分析

がま君	かえる君	分 析
「かえるくん、どうして、きみ、ずっとまどの外を見ているの。」	「だって、今、ぼく、お手紙をまっているんだもの。」	初めてがまくんが自分から質問をした場面。そわそわして手紙を待っていたかえる君が、とうとうがまんできずにがま君に秘密にしていたことを話してしまう、そのきっかけとなる一言。
「でも、来やしないよ。」	「きっと来るよ。」	
「だって、ぼくが、きみにお手紙出したんだもの。」	「きみが。」	ついにかえる君が本当のことをしゃべってしまう。がま君の悲しみを和らげようとするかえる君の優しさが感じられる。
「お手紙になんて書いたの。」	「ぼくは、こう書いたんだ。『親愛なるがまがえる君。ぼくは、きみがぼくの親友であることをうれしく思っています。きみの親友、かえる』」	お互い相手を自分の親友と読んで、そのことを「うれしい」と思っている。自分の気持ちを素直に表現しあう2人。
「ああ。」「とてもいいお手紙だ。」		「ああ。」は感動を表わしている。初めての手紙が届くことを期待する気持ちと、かえる君の優しさに感激する気持ちが混じった感嘆詞。

④本時で比べるさし絵や叙述

この作品は作者であるアーノルドローベルさんが挿絵もかいているので、がま君とかえる君の心情を読みとるために挿絵を有効利用したい。

	一場面の二人の様子	四場面の二人の様子
叙述	ふたりとも、かなしい気分でげんかんにこしを下ろしていました。	ふたりとも、とてもしあわせな気持ちでそこにすわっていました。
さし絵	<ul style="list-style-type: none"> ・二人とも口もとが下がり、悲しそう。 ・まぶたが下がり、悲しそう。 ・二人とも膝の上に手を組んで考え込んでいる。 ・がま君の足が重なっていて、悲しみがあふれている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・二人とも口元が上がり、微笑んでいる。 ・かえる君の口が開いていて、何か話しているようだ。 ・ポストを見ているようだ。 ・肩を組んで、仲良しのようだ。 ・満足した顔。